

時計

津守 真

最近、時計を捨てる子どもに相次いで出会い、人間にとっての時間について考えさせられた。

今年三月に卒業して中学にいった子どもの母親たちと懇談したときのことである。特殊学級の中学生にいたH男は、新しい学校に張り切っているのだが、授業時間が四十五分ごとに区切られるのでそれが煩わしい。入学して何週間か過ぎたころ、家中の時計の

針を全部止めてしまったという。私共の学校では、時間割で活動を区切つていらないから、新しい学校で、自分のしていることを最後までやり遂げられないのが残念なのだろう。母親は、家中の時計で動いているのは私の腕時計だけなんですと言つて笑つた。たくましくエネルギー・シユに動いていろいろのエピソードをもつH男が、時計の針を止めれば時間割の生活が解決すると思っている姿を思い浮か



べると、ユーモラスにすら感じてしまう。

丁度こんな話をきいた頃、私の養護学校の六年生のM夫は、学校中の壁にかかっている

時計を、苦心してはずしてゴミ袋の中に捨てていた。この子はいつも自分でこうときめると結局はやってしまうので、それほどまでにそうしたいのなら、何かこの子なりの理由があるようと思えて、職員の側には、それにむしろ協力したい気持ちが湧いてしまうのである。ホールの壁時計は、高い所からおろした後、文字盤をはさみで切り破ってしまった。捨てられた時計はあとで取り出してしまってあるけれども、何週間も壁時計なしで過ごすことになった。

だが、この子はどうして時計を捨ててしまうのだろう。私共の学校では、時計の時間によつて生活を区切ることはしていないはずな

のに、どうしてそんなに時計にこだわるのだろう。この子は時計を捨ててしまいながら、時が進行することを望んでいないのだろうか。

半年程以前に、この子はラジオの時報を一時間ごとに聞いていた時期があった。その頃は、時報の五分位前になると何をしていてもラジオの前にきて、時報の鐘が鳴るのを待つた。それはかなり頑固なほどで、避難訓練の時にも、ラジオの前から決して離れようとしなかった。本当の地震だったとしても同じではないかと思われた。この子が時計を捨てはじめたとき、私はこのことをすぐに思い出した。

私は、母親に、「M夫君は時間が進行するのを望まないのでしょう」と話すと、いつもこうしたことで苦労しつづけている母親は、そうだと思うと言つてから、次のような考え方

を述べた。この子は特に気に入ったTVやラジオの番組があつて、どうしてもそれを見てしまう。それは好きだというだけではなくて、見ないではいられないで、この子には苦痛とすら思えるのだろう。時計を捨ててしまわなければ、その気持ちから解放されないのでないかというのである。私はさすがにこの母親の見解に感心した。

私も夜半のラジオの番組で同じような経験をしたことがある。時計がその時刻になるとスイッチを入れないと気が済まないといつのも、神経が疲れるものである。時計がなればどんなに気が楽だろうと思う気持ちには共感できる。

時計の時間は、私共が何をしていようと否応なしにやってくる外的に進行する時間である。それに対して、私共が生きて活動して

いる時間は、時計の針とは違った進み方をする。人が生きている時間には、助走の時があり、頂点に向かう充実の時があり、余韻をたてのしむ時がある。波があり、起伏がある。また突然の転回の時がある。

そのような、人が生きる生命的時間は、個人によって進み方が違う。その点では個人的時間のようにみえるが、それは他から切り離された閉鎖的な個人性ではない。ある人の生命的時間の流れは他の人のそれと重なり合って、複数の場の力動性が生じる。このことは保育の場を考えると分かり易い。ひとりひとりが充実してそれぞれの活動をするときに、全体の場が活気をもつてることを私共は毎日のように体験している。このことは大人の日常生活でも、根本において変わらないだらう。大人の日常生活では、それぞれの個人が生きている生命的時間の節々で時計の時間が

参照され、社会的活動が調節される。約束の時間、汽車の時間など。

個人の生命的時間は、社会の場に開かれているだけでなく、その全体が共通に生きる宇宙的時間の中にある。朝と夕、四季など、時計を越えた自然の時間の中で人々は生きている。時計は捨てても、自然の宇宙的時間を捨てるわけにはいかない。むかし、時計が普及していなかつた頃には、日の出、日の入りなどの自然現象が時計の代わりをしていたのだろう。それが逆転して、時計によって生の活動が規定され束縛されるようになつたとき、生命性を回復するのに時計を捨てる必要が生じても不思議はない。

M夫が学校でも家でも時計を捨てようとしたらとき、それによつて外的時間の束縛を断ち切り、自分自身の生命的時間を回復しようと

試みたと考えられないだろうか。こんなことを考へてゐる間に、夏のように暑い日が数日作られた。M夫は一日中、そして何日も、そこでゆつたりと過ごしていた。それは、時計を捨てるこことよつて得られた自由を味わつてゐるようと思えた。

現代は、幼児が自分の腕の時計を気にしながら遊ぶ時代である。時計を捨てようとすると子どもたちの姿に、人間の自然の、そして健全な欲求を見る事ができる。

(愛育養護学校)